

(3) 現在の世田谷

2011 年度(平成 23 年度)の土地利用現況調査によると、区内宅地の 74% (区全体面積の 49.4%) が住居系の土地利用となっています。また、用途地域の指定では住居系が 9 割 (第一種低層住居専用地域が 5 割) の面積を占めており、住居系用途地域の占める面積割合は 23 区の中で最も高くなっています。また、区内の約 4 分の 1 をみどりが占めています。

区ではみどり豊かな環境に向けて区制 100 周年を迎える 2032 年(平成 44 年)にみどり率 33%を目指しています(『世田谷みどり 33』)。このような現況に即して、「世田谷区みどりの基本条例」などの法令制度を運用し、みどり豊かな住宅地の街づくりに取り組んでいます。



屋敷林



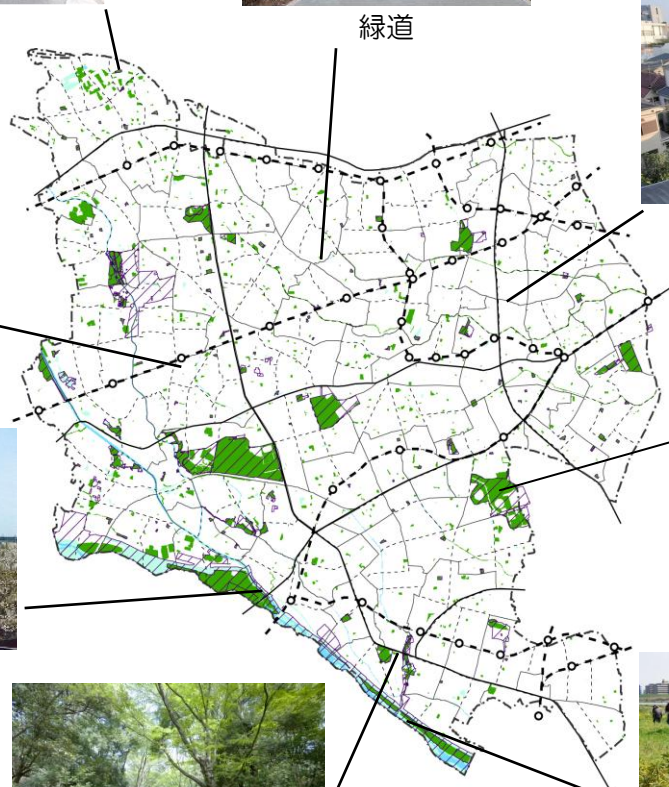
緑道



住宅地



商店街



公園



国分寺崖線



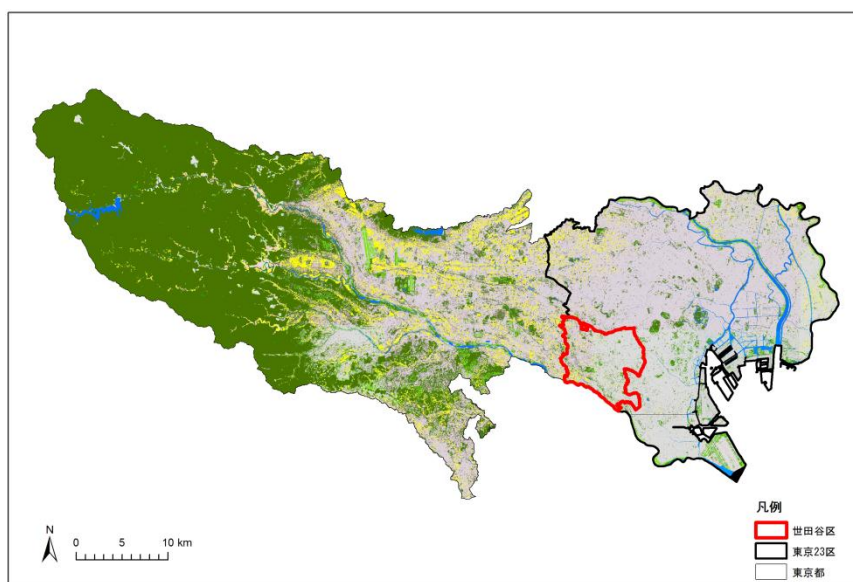
等々力溪谷



多摩川

東京都の緑被（樹林や草地で覆われた土地）は、東京都西部の関東山地や南部の多摩丘陵にかけて分布していますが、東京都東部は市街地が多く、緑被は大規模な公園緑地に局所的に分布しています。

世田谷において、緑被は区西部に国分寺崖線や多摩川沿いに分布しており、区東部は市街地が多く、緑被は少なくなっています。



図●東京都の緑被及び水面の分布※1



図●世田谷周辺の緑被及び水面の分布※2

※1 2006 年度大都市圏における水循環と緑の回復に関する都市環境インフラ再生推進調査より作成

※2 1/25,000 植生図「川崎」「荏田」「東京国際空港」「溝口」「東京南西部」「東京南部」「吉祥寺」「東京西部」「東京首都」GIS データ(環境省生物多様性センター)を使用し、世田谷区が作成・加工したものである。

(<http://gis.biodic.go.jp/webgis/>)

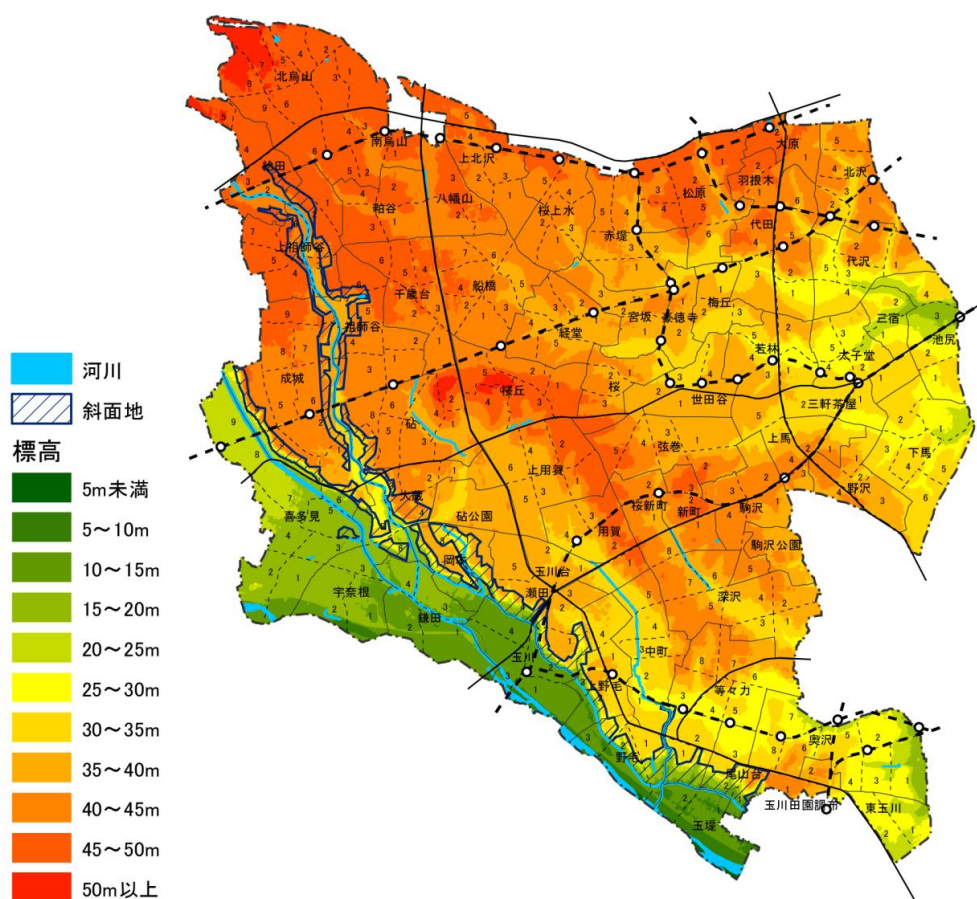
奥多摩部分については、第 6 回・7 回自然環境保全基礎調査(環境省生物多様性センター植生調査情報提供ホームページ)より補填した。

(2) 地形

主に武蔵野台地と低地からなり、台地南西端の国分寺崖線が特徴

世田谷の地形は、主に武蔵野台地（標高 30～50m）と低地（標高 10～25m）から成り立っています。台地は中小河川によって枝状に浸食され、その結果、丘や谷といった起伏が形成されました。このほか、低地は、多摩川沿いに広がっています。

世田谷の地形を特徴づけるものとして、国分寺崖線があります。国分寺崖線は、野川・多摩川に沿って続く高さ 10～20mの斜面地で、約 10 万年前から多摩川が武蔵野台地を削ってできました。区内に残る唯一の帯状緑地帯であり、世田谷の「みどりの生命線」となっています。



図●世田谷の地形※1

※1 世田谷区の土地利用 2011. 2013 年 5 月, 世田谷区発行

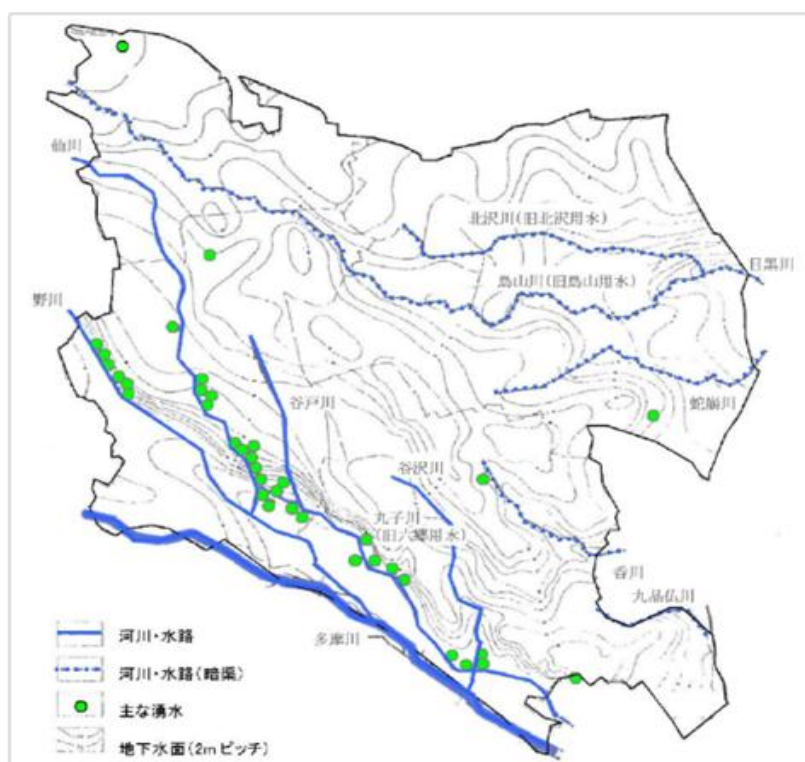
(3) 水系：河川及び地下水

多摩川水系、呑川水系及び目黒川水系があり、多くの河川が存在。湧水は約 100 か所あり、広い範囲に宙水（ちゅうみず・ちゅうすい）※¹も存在

世田谷には多摩川や野川をはじめとして多くの河川があります。区東部から北部にかけての河川の多くは蓋をされ暗渠化されており、水と緑の豊かな水辺環境を形成している場所のごくわずかです。

湧水は、区内に約 100 か所の湧水地点が存在しており、そのうち等々力溪谷・等々力不動尊、烏山弁天池、岡本静嘉堂緑地の 3 か所は「東京の名湧水 57 選」に選定されています。特に、国分寺崖線を軸とした世田谷の南西部は、湧水が多く分布している貴重な地域です。

また、世田谷の北西部の北烏山周辺には、地表近くの地下水である宙水があり、烏山弁天池の水を満たす源となっています。



図● 世田谷の河川及び主な湧水※¹

※¹ 水辺の再生計画 2008年7月, 世田谷区発行

(4) みどり

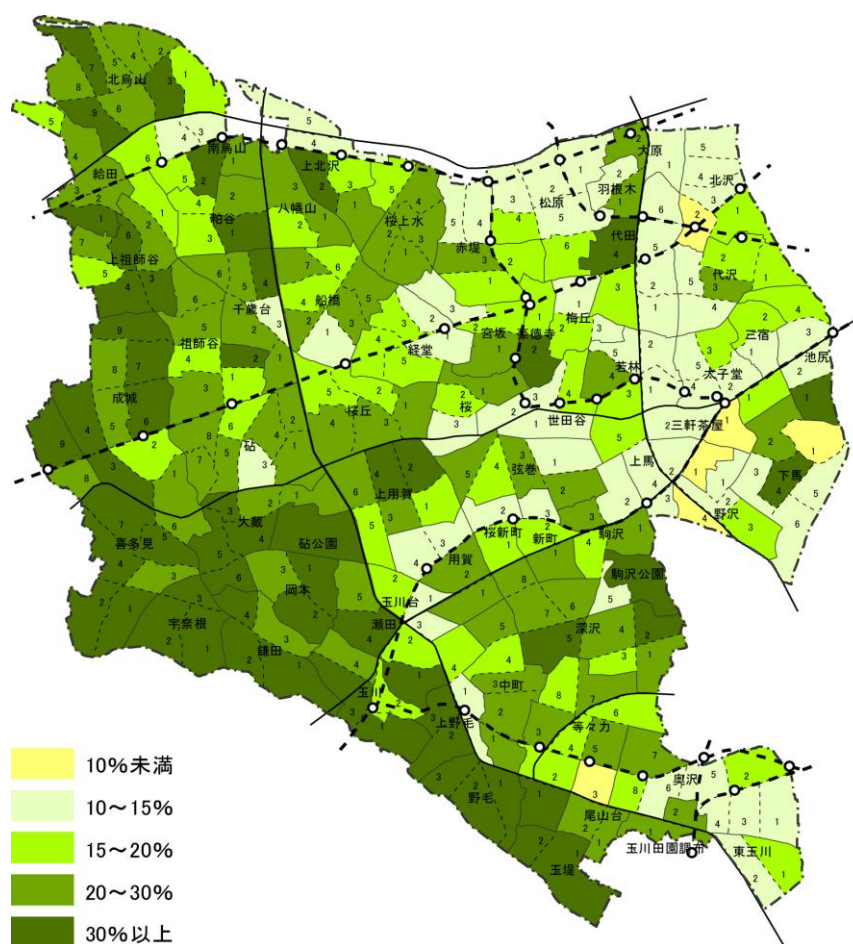
①みどり率^{※1}

みどり率は西部が高く、みどりの多くは民有地に分布

2011 年度（平成 23 年度）に実施した区の調査では、世田谷のみどり率は 24.6%であり、東京 23 区の中では比較的多くのみどりが存在しています。しかし、近年は減少傾向にあり、特に草地の減少率が大きくなっています。

みどり率は世田谷の西部が高く、中央部、東部の順に低くなっています。特に多摩川沿いの低地部から国分寺崖線にかけての一带は、みどり率が 30%以上であり、みどりのみずの豊かな地域です。

また、多くのみどりは民有地に分布していることから、民有地において継続的にみどりを確保することが、今後の大きな課題となっています。



図● 世田谷のみどり率^{※1}

※1 緑が地表を覆う部分に、水面と公園内の緑に覆われていない部分を加えた面積が、世田谷区全域に占める割合

※2 世田谷区の土地利用 2011, 2013 年 5 月, 世田谷区発行

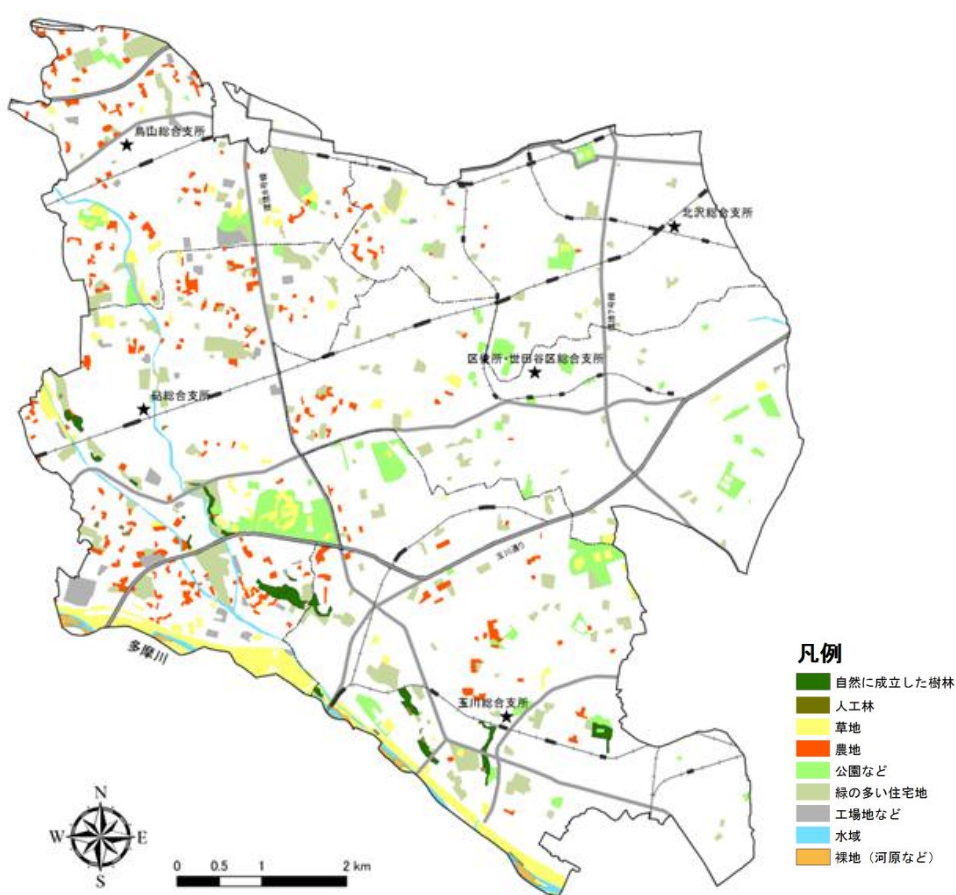
②植生の分布状況

自然性の高い樹林や草地は、多摩川沿いの低地部や国分寺崖線に集中

世田谷の植生は、区域全体にまばらに点在しています。まとまった植生が見られる場所としては、「公園」や「緑の多い住宅地」、河川敷の「草地」などが挙げられます。

特徴的な植生としては、国分寺崖線沿いに「自然に成立した樹林」が点在しており、貴重な自然が残されています。また、多摩川沿いの低地部から国分寺崖線にかけては、帯状に植生が連続しています。

また、東部を除き、広く「農地」が点在しています。



図● 世田谷の植生の分布状況

第6回・7回自然環境保全基礎調査植生調査情報^{※1}より作成

^{※1} 環境省生物多様性センター 第6回・7回自然環境保全基礎調査植生調査情報提供ホームページ

③農地

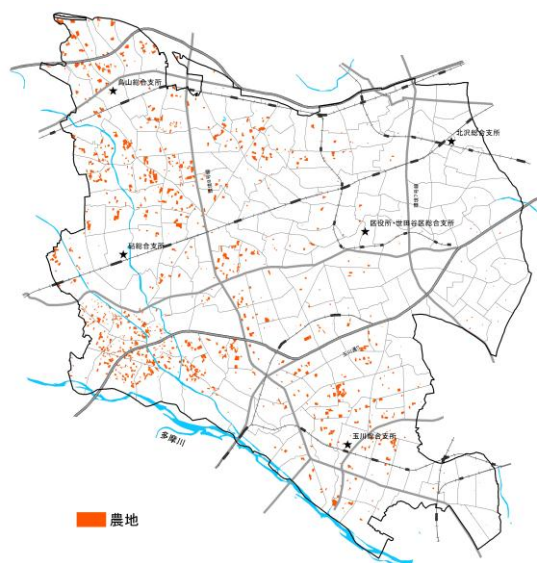
農地は東部を除き点在、数は年々減少傾向

農地は、食料を生産する場であるとともに、多くの生きものにとっての生息・生育の場でもあります。また、農作業の体験や災害時の防災拠点などの多面的な機能を持ち、重要な環境のひとつです。

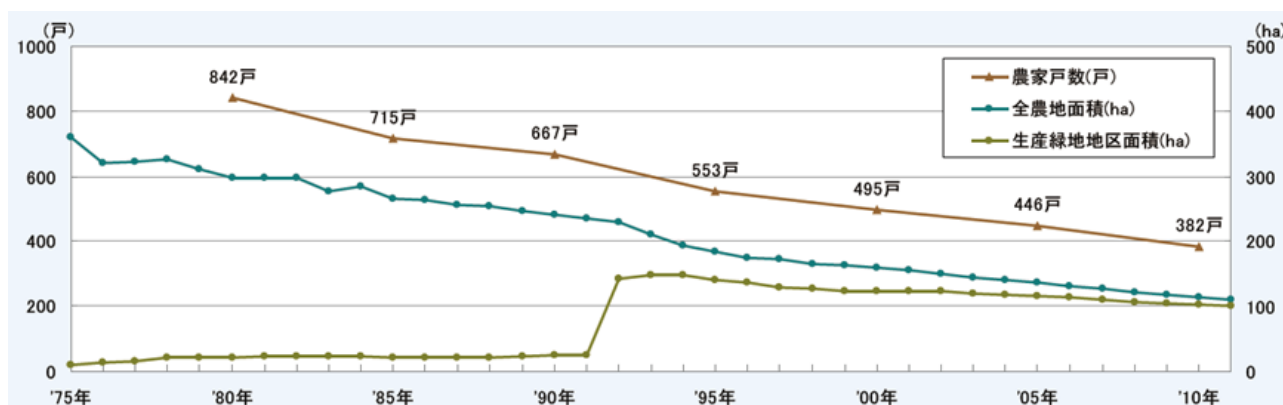
世田谷の農地は、2011年（平成23年）時点で108.6haであり、世田谷の総面積約58km²に対して約2%とごくわずかです。

図●をみると、農地は1975年（昭和50年）以降、毎年減少しており、そのうちの生産緑地地区※¹については、1993年（平成5年）までは増加傾向にありましたが、その後は減少傾向にあります。

農家戸数については、1990年（平成2年）から2010年（平成22年）までの20年間に285戸（42.7%）に減少し、1戸あたりの平均耕地面積も1.4haから0.3haに減少しています。



図● 世田谷の農地の分布状況※²



図● 全農地と生産緑地地区の面積および農家戸数の推移※³

※1992年（平成4年）の生産緑地地区面積の急激な増加は、1991年（平成3年）の生産緑地法及び地方税制の改正に伴う生産緑地の指定の変更によるもの。

※¹ 要件を満たす農地等について、指定希望者からの申出に対し、区が審査のうえ認められる農地等について都市計画の手続きを経て指定するもの。

※² 世田谷区の土地利用 2011, 2013年5月, 世田谷区発行

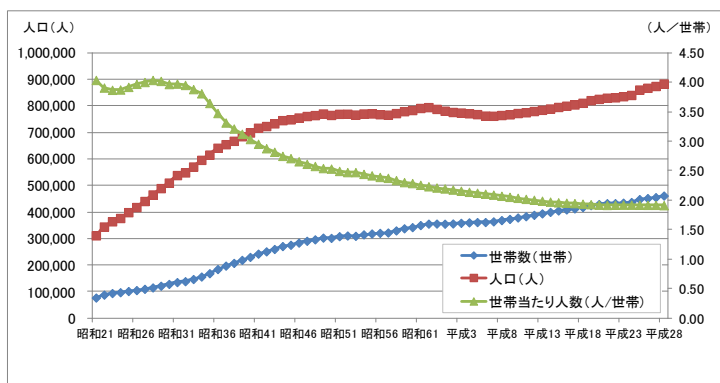
※³ 世田谷区農家基本調査集計表, 2015年8月, 世田谷区農業委員会

④その他：人口の推移と住宅地の分布状況

住宅都市として発展をつづけ、人口は 89 万人を越え、一大消費地に

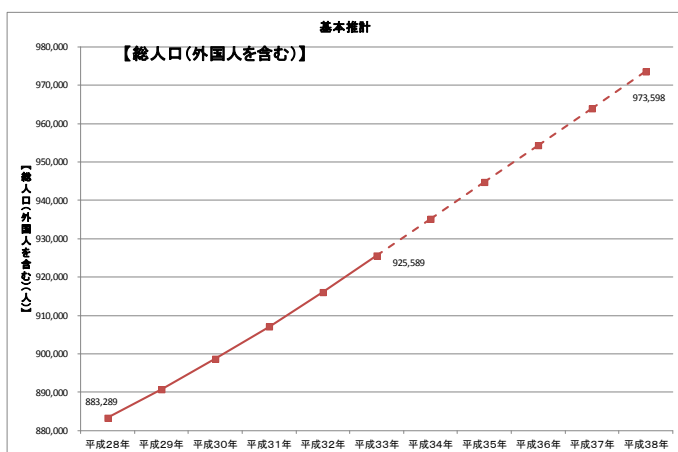
住宅都市世田谷として発展するなかで、経年的に人口が増加し、住宅地が拡大しました。その結果として、現在のみどりとみずの状況があります。人口及び世帯数については、図●に示すように、世田谷では増加傾向にあり、人口は 2016 年 5 月 1 日現在で 89 万人を超えています。一方、世帯当たり人数は減少傾向にあります。なお、将来の人口については、図●に示すように世田谷では今後も人口の増加傾向が続く見込みとなっており、2026 年（平成 38 年）にはおよそ 98 万人になると推計されています。

住宅地については、図●の土地利用構成比率をみると、建物の敷地として

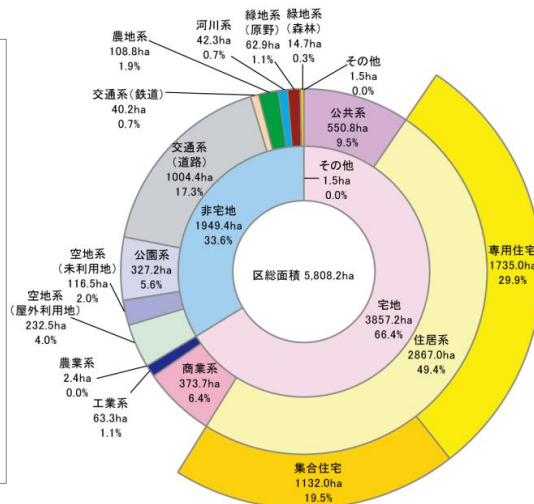


利用されている「宅地」が区全体面積の 66.4%を占めており、そのうち住居系が最も多く宅地の 74%（区全体面積の 49.4%）を占めています。区内で住宅地の占める割合が多いことがわかります。

図● 世田谷の人口と世帯数の推移※1



図● 将来の人口推計※2



図● 世田谷の土地利用構成比率※3

※1 世田谷区の統計書（人口編），2016 年 3 月，世田谷区発行

※2 新人口推計結果（基準値：平成 28 年 1 月 1 日時点、推計結果：平成 28 年 4 月），世田谷区作成

※3 世田谷の土地利用 2011，2013 年 5 月，世田谷区発行

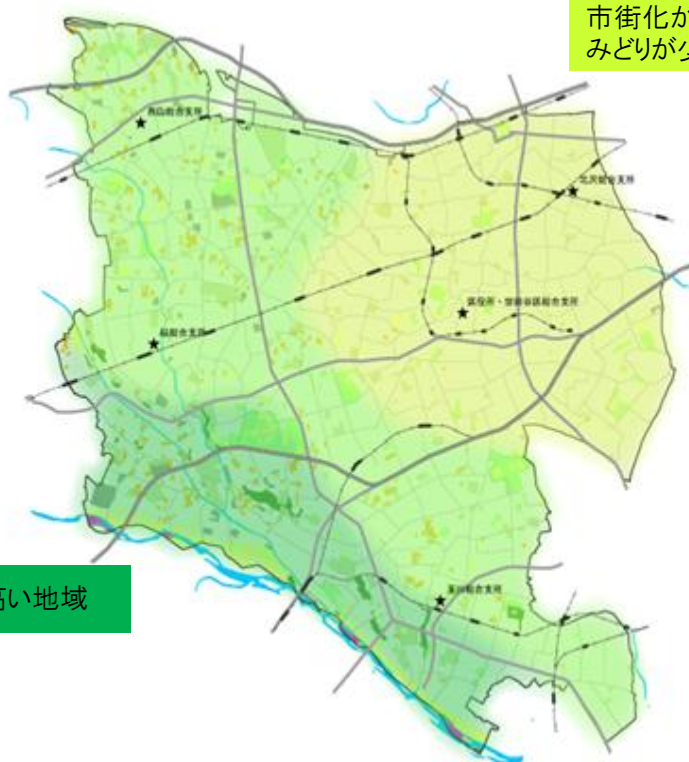
3. 世田谷の生きものの現状

河川及び主な湧水（図●）、みどり率（図●）、農地の分布状況（図●）などのみどりとみずの特徴から、世田谷を大きく3つの地域に分けることができます。南西部は多摩川や国分寺崖線などのまとまった緑が多く残る、「みどりの連続性が高い地域」、中央部は住宅の中に社寺林や農地が点在する、「住宅地の中に中・小規模緑地が点在する地域」、東部は都心に近く開発が進んでいる、「市街化が進み比較的みどりが少ない地域」という特色が見られます。ここでは、現地調査で確認された生きものを地域ごとに紹介します。

住宅地の中に中・小規模緑地が点在する地域

市街化が進み比較的みどりが少ない地域

みどりの連続性が高い地域



図● 世田谷の地域性区分

(1) みどりの連続性が高い地域

この地域は、多摩川や国分寺崖線を中心としたみどりの連続性が高い地域です。世田谷で最も多様な環境が見られる地域であり、他の2地域にはない崖線の地形に由来する成城三丁目緑地の斜面林と湧水、その湧水から流れる野川や多摩川などの河川が存在しています。また、それらの環境に加え、みどりの連続性が高いことから、生きものが最も多様です。



成城三丁目緑地



野川

図● みどりの連続性が高い地域の代表的な緑地

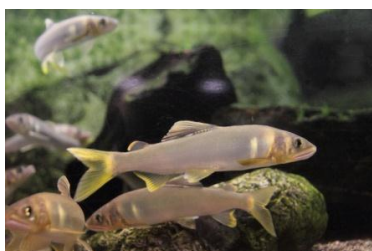
多摩川は、大河川の中下流域を生息域としている淡水に生息する生きものや海と川を行き来する生きものが生息しています。また、河川敷には裸地環境や明るい草地があります。河川敷の裸地や水辺の代表的な生きものとして、昆虫類のジャコウアゲハが河川敷の草地を利用し、魚類のアユやオイカワは河川に一般的に見られます。また、希少な生きものとして、鳥類のシギ・チドリ類が河川敷で見られます。

湧水は、国分寺崖線沿いなどの樹林が残っているところに多くあります。そのような環境を利用して、希少な生きものである、魚類のドジョウや底生生物のサワガニ、昆虫類のオニヤンマ、ゲンジボタル、ヤマトクロスジヘビトンボなどが湧水から流れる小さな流れに生息しています。

崖線斜面にはクヌギ・コナラを主体とした雑木林や常緑広葉樹林、竹林があります。そこに生息する代表的な生きものであるカブトムシや、希少な生きものであるアカシジミは、クヌギ・コナラを利用しています。そのほか昆虫類のヒグラシや爬虫類のヒバカリは薄暗い樹林を好み、鳥類のアオゲラなどは枯木を利用しています。また、雑木林の中にはアカマツが点在するほか、キンランのような希少な植物も生育しています。

世田谷で唯一の水田である次大夫堀公園では、明るく流れのない水辺環境を好む生きものとして、昆虫類のアメンボや、希少な昆虫類であるミヤマアカネが生息しています。

住宅地や屋敷林・社寺林、公園緑地では、他の地域区分とほぼ同様の生きものが見られます。



アユ



カブトムシ



クヌギ・コナラの雑木林

図● みどりの連続性が高い地域で見られる生きもの

表● みどりの連続性の高い地域で見られる生きもの

代表的な生きもの	東京都レッドデータブック 区部	外来生物等
植物：リョウメンシダ、イノデ、クヌギ、コナラ、シロダモ、モミジイチゴ、コクサギ、カクレミノ、ムラサキシキブ、ガマズミ、ホウチャクソウ、ナルコユリ 哺乳類：アブラコウモリ、アズマモグラ、タヌキ 鳥類：シジュウカラ、ヒヨドリ、ムクドリ、ホオジロ 爬虫類：トカゲ、カナヘビ 両生類：アズマヒキガエル 昆虫類：オニヤンマ、ミヤマアカネ、ヒグラシ、ヤマトクロスジヘビトンボ、コクワガタ、カブトムシ、ウバタマムシ、ジャコウアゲハ、アカシジミ、ルリタテハ、アメンボ 魚類：アユ、オイカワ、タモロコ	植物：アスカイノデ、ハンノキ、ウmanoszusクサ、ホトトギス、エビネ、キンラン、ササバギンラン 哺乳類：アズマモグラ 鳥類：シギ・チドリ類、アオゲラ 爬虫類：トカゲ、カナヘビ、ヒバカリ 両生類：アズマヒキガエル 昆虫類：ゲンシボタル、オニヤンマ、ミヤマアカネ、ヒグラシ、ヤマトクロスジヘビトンボ、ウバタマムシ、アカシジミ 魚類：ドジョウ 甲殻類：サワガニ	哺乳類：ハクビシン 爬虫類：ミシシippアカミミガメ 昆虫類：アカボシゴマダラ

(2) 住宅地の中に中・小規模緑地が点在する地域

この地域は、公園や屋敷林、畑などの中・小規模のみどりが点在する地域です。住宅地が広がる中にも、屋敷林や社寺林、畑などの古くからあるみどりが残されており、そのうち一部は北烏山九丁目屋敷林のような市民緑地^{※1} となっています。また、小河川が暗渠化されて、烏山川緑道などの緑道になっています。そうした環境を利用する身近な生きものが生息・生育しています。また、住宅の庭や生垣、マンションや事業所の敷地のみどりも生きものが利用する場となっています。



北烏山九丁目屋敷林市民緑地



烏山川緑道

図● 住宅地の中に中・小規模緑地が点在する地域の代表的な緑地

屋敷林や社寺林は、宅地開発が進む中でも、昔からのみどりが比較的まとまった面積で残されています。代表的な生きものとして、昆虫類のコガタスズメバチ本土亜種は屋敷林や社寺林などの古くからある樹林を利用し、林床にはケヤキの実生が見られる場所もあります。また、希少な生きものとして、鳥類のアオバズクが生息し、林床には植物のエビネが生育しています。

公園の一部に残された雑木林は、落葉広葉樹が主体の明るい林です。代表的な生きものとしては、サトキマダラヒカゲ、植物のケヤキやムクノキ、シラカシ、ジャノヒゲが見られます。

農地には、代表的な生きものとして、鳥類のヒバリやムクドリ、ツグミ、昆虫類のエンマコオロギやオンブバッタ、ウリハムシ、モンシロチョウ、ベニシジミなどの畑や明るい草地を利用する生きものが見られます。また、希少な生きものとして、爬虫類のカナヘビが草地に生息しています。

中小規模の公園や以前的小河川を利用して作られた緑道では、代表的な生きものとして、鳥類のコゲラやオナガ、ムクドリ、昆虫類のヤマトシジミ本土亜種、植物のコナラやケヤキなどの樹林のほか、ヒメジョオン、ナズナなどの路

^{※1} 市民緑地とは、都市に残された民有地のみどりを保全し、地域に憩いの場を提供することを目的とした都市緑地法によって定められている制度です。

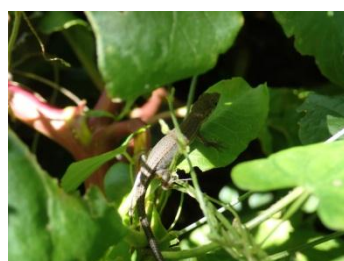
傍の身近な草花やそれを利用する生きものが見られます。また、希少な生きものとして、大規模な公園緑地には鳥類のオオタカが生息しています。

住宅地には、代表的な生きものとして、鳥類のスズメ、植物のオオバコや外来種のシロツメクサなどの人家や人の生活に身近な場所で生活する生きものが見られます。

野川などの河川では、代表的な生きものとして植物のツククサが見られるほか、希少な生きものとして鳥類のカワセミなどの水辺や湿地を利用する生きものを見ることもできます。



ヒバリ



カナヘビ



ススキ

図● 住宅地の中に中・小規模緑地が点在する地域で見られる生きもの

表● 住宅地の中に中・小規模緑地が点在する地域で見られる生きもの

代表的な生きもの	東京都レッドデータブック 区部	外来生物等
植物：シラカシ、コナラ、ムクノキ、ケヤキ、ナズナ、シロツメクサ、コニシキソウ、タチツボスミレ、ヤエムグラ、オオバコ、ジャノヒゲ、ツククサ、ススキ 哺乳類：アブラコウモリ、アズマモグラ、タヌキ 鳥類：スズメ、ホオジロ、ヒヨドリ、エナガ、ムクドリ、ツグミ、コゲラ、オナガ、ヒバリ 両生類：アズマヒキガエル 昆虫類：コガタスズメバチ本土亜種、ヤマトシジミ本土亜種、カナブン、サトキマダラヒカゲ、エンマコオロギ、オンブバッタ、ウリハムシ、モンシロチョウ、ベニシジミ	植物：エビネ（※） 哺乳類：アズマモグラ 鳥類：ヒバリ、カワセミ、アオバズク、オオタカ 爬虫類：カナヘビ 両生類：アズマヒキガエル	植物：シロツメクサ、コニシキソウ、オオキンケイギク、ヒメジョオン 哺乳類：アライグマ 昆虫類：アカボシゴマダラ

(※) は現地調査の結果、民家の庭で確認されていることから植栽と考えられる。

(3) 市街化が進み比較のみどりが少ない地域

この地域は、都市に近く、古くから住宅地としての開発が進んだため、比較のみどりが少ない地域です。住宅地が密集する中に、屋敷林や公園緑地が局所的に残っています。その中の一部は、大原一丁目市民緑地や三宿の森緑地のよう公園緑地として管理されています。生きものは、住宅の庭やベランダなどのプランター、屋上緑化や壁面緑化など、都市の中に残された環境を利用して生息・生育しています。



大原一丁目市民緑地



三宿の森緑地

図● 市街化が進み比較のみどりが少ない地域の代表的な緑地

住宅地や市街地が地域を広く占めており、代表的な生きものとして、昆虫類のツマグロヒョウモンが見られ、希少な生きものとしては、人家や人の生活に身近な場所で生活する爬虫類のヤモリなどの生きものが生息・生育しています。

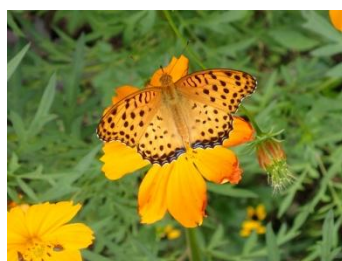
面積は少ないですが屋敷林や社寺林が残り、代表的な生きものとして、鳥類のシジュウカラやハシブトガラス、昆虫類のムラサキシジミ、植物のスタジイやワレモコウ、ホタルブクロ、希少な植物のエビネなどの樹林環境を好む生きものが生息・生育しています。

公園緑地には、代表的な生きものとして、鳥類のキジバトやオナガ、昆虫類のヤマトシジミ本土亜種のほか、世田谷公園のツツジやナンテンハギなどの管理された樹林や草地、シバ地に生息する生きものが見られます。

市街地を流れる小河川や、人工的につくられた水辺には、代表的な生きものとして、鳥類のハクセキレイのほか、外来種で甲殻類のアメリカザリガニも確認されています。



ヤモリ



ツマグロヒョウモン



カワラナデシコ

図● 市街化が進み比較のみどりが少ない地域で見られる生きもの

表● 市街化が進み比較のみどりが少ない地域で見られる生きもの

代表的な生きもの	東京都レッドデータブック 区部	外来生物等
植物：スギナ、イチヨウ、スタジイ、ムクノキ、ツバキ、アジサイ、フジ、メヒシバ、エノコログサ、ネジバナ 哺乳類：アブラコウモリ 鳥類：オナガ、ハクセキレイ、シジュウカラ、ハシブトガラス、キジバト 爬虫類：ヤモリ 両生類：アズマヒキガエル 昆虫類：ヤマトシジミ本土亜種、ムラサキシジミ、ツマグロヒョウモン	植物：カワラナデシコ（※）、ウマノスズクサ、キキョウ（※）、ホトトギス（※）、エビネ（※） 両生類：アズマヒキガエル 爬虫類：ヤモリ	鳥類：ガビチョウ、ワカケホンセイインコ 甲殻類：アメリカザリガニ

（※）は現地調査の結果、民家の庭で確認されていることから植栽と考えられる。

コラム NO.● 世田谷に暮す貴重な生きもの

都市の中の緑地にも貴重な動物が生息しています。ここで紹介する写真は、世田谷で撮影されたものです。社寺林のアオバズク、大規模緑地のオオタカなどの絶滅が危惧されている鳥類や河川のカワセミなど清流に生息する鳥類が確認されています。また、東京都で準絶滅危惧種に指定されるタマムシや近年、セイヨウミツバチに生息地を追われているニホンミツバチなど世田谷にも貴重な生きものが生息しています。



4. 生物多様性がもたらしている恵み

4 つの生物多様性の恵み（11～12 頁参照）に照らすと、世田谷の生物多様性は、次のような恵みをもたらし、私たちの暮らしを支えています。私たちの暮らしの中にある身近な恵みから紹介します。

（1）生きものの生息・生育地の提供

これまで見てきたように、世田谷には多摩川や小河川沿いの低地、武蔵野台地が存在しています。世田谷には、様々な環境が存在し、多様な生きものの生息・生育を支えています。



生きものの生息・生育地の提供
（崖線緑地のキンランや池のアズマヒキガエルなど）

【世田谷のみどりの生命線としての国分寺崖線】

世田谷の南部には、立川市、国分寺市、小金井市などから連なる国分寺崖線があります。国分寺崖線は、「世田谷のみどりの生命線」とも呼ばれ、樹林や湧水などの豊かな自然環境が残る区西部の中心となるみどりで、カタクリやゲンジボタルなど、希少な動植物が生息・生育できる環境としても重要性が増しています。



国分寺崖線とカタクリ

【生きものの生息・生育場所としての水辺】

世田谷には、大河川が多摩川のほか、多摩川に流入する野川や仙川などの中小河川があります。また、区内には、数多くの湧水が分布するなど水辺環境に恵まれており、そのほとんどは区西部に分布しています。これらの水辺には、サギ類やカモ類などの水鳥のほか、絶滅危惧種のメダカやドジョウなどが生息しています。



野川とコサギ

(2) 生活環境の調整

みどりは、その蒸散作用により気温の上昇を抑える効果があり、緑化を進めることで都市のヒートアイランド現象※¹を緩和します。また、農地や樹林地には、雨水を地中に浸透して、大雨の際に雨水が河川に集中するのを抑え、地下水や湧水を維持する機能があります。



生活環境の調整
(木陰、農地の雨水浸透など)

【みどりのネットワークとしての街路樹や緑道】

街路樹は、みどり豊かな風格ある景観や木陰をつくりだし、快適な通行を支えています。

また、世田谷では、暗渠化された中小河川の上を緑道として有効利用しています。緑道は、通勤・通学・散歩などの歩行空間として利用されるほか、身近な生きものの生息の場、歩行者の安全と緊急避難通路の確保などの様々な機能があります。



烏山川緑道

【新たに創出された屋上緑化などのみどり】

近年、深刻な問題となっているヒートアイランド現象の緩和や、よりよい自然環境の創出のために、市街地における建物の緑化手法の一つとして屋上・壁面緑化が注目されています。また、都市の環境改善効果として、温度調整や建築物の保護効果、視覚から人間の心理に及ぼす良い効果などが期待できます。

世田谷では民有地の緑化推進のため、屋上・壁面緑化の助成を実施しており、区内全域でその面積は増えています。



屋上緑化

※¹ ヒートアイランド現象とは、郊外に比べ、都市部ほど気温が高くなる現象のことで、東京では過去 100 年間で、約 3℃気温が上昇しました。

(3) 資源の供給

世田谷には、地下水が広く分布しており、地上へ湧き出しているところもあります。このような地下水は、健全な水循環の役割を担っています。また、世田谷には、23区内でも比較的多くの農地が残っており、様々な農作物が栽培されています。



資源の供給（農産物、湧水など）

【世田谷の生活用水としての地下水】

世田谷の国分寺崖線に沿った地域に多く分布する湧水は、自然に潤いを与え、みどりや生きものを育てています。また、地下水は健全な水循環の役割を担うとともに、区内に多くある井戸から井戸水として、散水などの生活用水（飲料以外）に広く利用され、災害時の備えにもなっています。また、烏山寺周辺には「^{ちゅうすい}宙水」と呼ばれる浅い地下水があり、非常に貴重な地下水です。



大蔵運動公園の洗い場

【世田谷の農作物生産の場としての農地】

世田谷は、江戸時代のころから、江戸市中向けに野菜などを供給する農村として発展してきました。戦後の高度経済成長とともに都市化が進み、多くの農地は宅地化されましたが、各所に残された農地は、近郊農村としての世田谷の原風景を今に引き継いでいます。そこでは“せたがやそだち”という名称で様々な農作物が生産されるほか、農業体験や自然環境を保全する場としても農地は重要な役割を担っています。



農地とせたがやそだち